

小熊 英二著



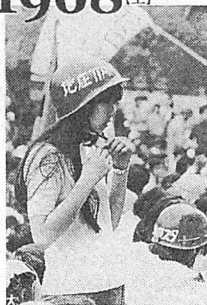
があるから捨てられない。それらを分類整理し、言葉にならない言葉を観測する、手製の「スパーカミオカンデ」的「ごみ屋敷」になってしまったのが、本書だと思ふ。

という事情だろうが、やはり読むには厚すぎる。この程度のシンブルな仮説をのべるだけなら、10分の1の分量で充分だ。だが著者は、あくまでも高性能の本格的な検証でないと気が済まなかったらしい。

小熊氏はなるべく主観を交えず、資料に語らせ、当時を客観的に再構成していく。体験の当事者には当たり前でも、忘れられかけていることを、記録に定着させた。記述はおお

小熊英二  
Onuma Eiichi

1968 (上)



若者たちの叛乱とその背景

(新耀社・各6800円)  
▼おぐま・えいじ 62年生まれ。慶応大教員。出版社勤務を経て東大博士課程修了。著書に『単一民族神話の起源』『日本人』の境界』『民主』と『愛国』などがある。

## 膨大な資料基に若者の思考を探る

り前でも、忘れられかけていることを、記録に定着させた。記述はおお

連合赤軍、へ平連、ウーマンリブまで、うねる時代の底流を、当時のピラや回想録など大量の資料から読み解いていく。

ならない。大人たちにも理解されな

たのでは、という。

かった。高度成長のあと、貧しさや

この仮説を検証するため、テキス

者をとらえた言葉にならない《現代的不幸》があった、と著者は言う。

わりに、「自分はなぜ生きるのか」

トの「ごみ屋敷」(たとえが悪くて

言葉にならないから「言葉がない」

の不登校や拒食症や自分探しに通じ

き散らされたヒラや日記や落書きの

「自己否定」など未熟な表現にしか

る、その最初の波が1968年だっ

類を、著者は丹念に拾い集める。他

人には価値のない紙クズでも、意味

物だとさえしよう。

も、必読の歴史資料となるに違いない。稀有な才能による、類例のない